

# 2021年度 大学院奨励研究員研究報告書

2022年 3月 16日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	青井 興太郎	印
-----	--------	---

指導教員

所属・職名	文学研究科・准教授	
氏 名	景山 洋平	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	自由の体系の象徴としての自然：カント『判断力批判』における体系問題の解明
採用期間	2021年 4月 1日 ～ 2022年 3月 31日

研究科委員長・研究科長 印	事務局印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

**研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）**

**（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）**

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
				担当箇所：		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

**（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）**

学会名	日本哲学会	開催地	オンライン
題目	趣味判断と超感性的基体：「感性的判断力の弁証論」の体系的意義の解明	発表年月日	2021年5月16日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

## 研究経過状況（3000字程度）

### ● 博士学位申請論文の経過概要

2021年11月25日付で博士学位申請論文「自由の体系の象徴としての自然：カント『判断力批判』における体系問題の解明」を提出した。2022年2月14日に開催された公開発表会及び口頭試問を経て、同年3月2日に開催された所属研究科委員会にて博士学位の授与が承認された。

### ● 論文の構成

博士学位申請論文の構成は以下のとおりである。2021年4月の時点では、第1部第2章の一部、第2部第2章および第3章の一部、第3部第1章の一部をすでに論文化していた。そのため、第1部第1章、第2部第1章、第3部第2章を新たに書き下ろし、すでに論文化していた部分とあわせて、全体を一つの論文として整合的かつ体系的に論述する必要があった。

序論

第1部 象徴論の枠組みからみた移行問題

第1章 移行問題の分析と反省的判断力

第2章 体系的解釈の枠組みとしての象徴論

第2部 目的論的自然観の確立に向けた機械論的自然観の相対化

第1章 趣味論における機械論的自然観の相対化

第2章 崇高論における機械論的自然観の相対化

第3章 有機体論における機械論的自然観の相対化

第3部 自由の体系の象徴としての自然

第1章 目的論自然観の展開

第2章 究極目的と神

結論

### ● 論文の要約

カントの『判断力批判』では、『純粋理性批判』で確立された理論哲学（「自然概念の領域」）と、『人倫の形而上学の基礎づけ』を経て『実践理性批判』で確立された実践哲学（「自由概念の領域」）の関係性（前者から後者への移行可能性）が問われる。しかし、従来の研究では、『判断力批判』で扱われる個々のトピックの独特さから、「移行問題」に対する解決の成否どころか、一冊の書物としての内的整合性さえ疑問視されてきた。このような問題に対し、本研究では、『判断力批判』第59節で論じられる象徴論に注目し、移行問題の背後にあるカントの企図を「自然概念の領域による自由概念の領域の象徴化」として顕在化することで、この書物の体系的読解を試みる。そのために、第1部第1章では、移行問題が提示される、いわゆる「第二序論」の第Ⅱ節を分析する。それにより、この問題の最終的解決には、(1)機械論的自然観の相対化、(2)目的論的自然観の展開、(3)「最高の根源的善」（神）の現存在の開示という三つの先決課題が存することを明らかにする。カントはこれらの課題を解決すべく「反省的判断力」という新たな判断力を導入する。しかし、彼の記述を表面的に分析するだけでは、この種の判断力の機能と上記の諸課題の間にあるはずの内的連関を明確化できない。そのためには、移行問題の前提にある形而上学的着想、つまり、自由概念の領域と自然概念の領域を「原型／模像」と捉える類比的理解の論理構造が解明されなければならない。第2章では、先述の象徴論の枠組みからこの問題へのアプローチを試みる。

カントによると、象徴化の成立には、象徴として指定される直観について反省される事柄と、理念について考えられている事柄との間に何らかの類似性が見出される必要が

ある。そのため、先述の象徴化の成立には、「自然概念の領域」について反省される事柄と、「自由概念の領域」について考えられている事柄との間に何らかの類似性が見出されなければならない。後者は、「最高の根源的善」と「最高の派生的善」を構成要素として含む自由概念の領域の存在体制そのものを指す。それに対し、前者は機械論的自然を指すため、さしあたり両者の間に類似性は成立しない。そこで、両者の間に類似性を見出すべく導入されたのが反省的判断力であり、この種の判断力の諸機能を通じて、上記三つの課題の解決が目指される。移行問題の解決プログラムの内的連関は、象徴論の観点からこのような仕方理解可能となる。

以上の点を踏まえつつ、第2部以降では『判断力批判』本論の議論を考察する。第2部第1章では、「感性的判断力の弁証論」を取り上げる。そこで論じられるのは、趣味判断一般の原理をめぐって生じる「趣味のアンチノミー」とその批判的解決である。「趣味の経験論」や「主観的合目的性の実在論」とは異なる独自の立場としてカントが提示するのは、「主観的合目的性の観念論」である。我々はこの立場に含まれる、機械論的自然観の唯一性に対する批判的含意を明らかにする。第2章では、崇高論を取り上げる。周知の通り、カントは「崇高」を「数学的」と「力学的」に区別する。多くの解釈者たちは両者を類比的に捉えようとする。しかし、こうした手続きをとる限り、例えば崇高論全体を自然支配の思想と特徴づけるハルトムート・ベームの批判に対し、満足できる反論を行うことができない。そこで我々は、力学的崇高論に固有の論理構造を剔抉し、この議論が自然支配の思想と根本的に相容れないことを明らかにする。それにより、崇高論に含まれる、機械論的自然観への批判的含意を解明する。第3章では、「目的論的判断力の弁証論」を取り上げる。そこで論じられるのは、機械論的原理と目的論的原理の対立および両者の統一可能性である。カントは、「直観的悟性」を目的論的判断力の原型とすることにより、両原理の対立を調停することができる。我々はその論証構造を明らかにすることにより、課題(1)の解決と、機械論的自然観から目的論的自然観への移行を見届ける。

第3部では、「目的論的判断力の方法論」を取り上げる。第1章では、目的論的判断力を通じて自然の全体がそのように捉えられるところの〈諸目的の体系〉の構造と根拠を明らかにする。それにより、課題(2)の解決が確認される。第2章では、自然全体の究極目的が論じられる「道徳的目的論」と、神の現存在の道徳的証明が扱われる「道徳神学」の論理関係を解明する。後者において実質的に論証されるのは、世界原因の道徳的性格である。自然的目的論では、世界原因の悟性的性格が示されるにとどまる。そのため、道徳的目的論を手がかりに、同じ世界原因の道徳的性格までを示そうとするのがカントの狙いである。我々はこの点に課題(3)の解決を見出すことができる。

以上の手続きを踏まえることにより、移行問題の解決に向けた三つの課題が達成される。すなわち、自然概念の領域のうちに自由概念の領域と同様の存在体制が見出される。このことは「感性的自然による超感性的自然の理念の象徴化」の成立を意味する。ここに我々は、自然概念の領域から自由概念の領域への移行の達成を見届けることができる。